映像解説パンフレット

海をまとう

—万祝(まいわい)染(ぞめ)のわざ—

千葉県立中央博物館
NATURAL HISTORY MUSEUM AND INSTITUTE, CHIBA

万祝

万祝とは?

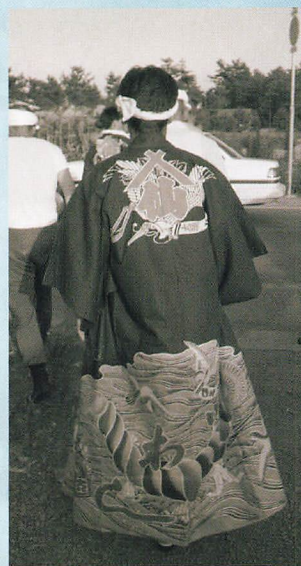
大漁の祝い着のことを万祝といいます。

千葉県では、かつて豊漁の際に網元や船主が船員である船子や網子の漁師をあつめてマイワイ、あるいはマシイワイという大漁祝いの祝宴を催し、引き出物として揃いの柄の反物を配りました。反物をもらった人々は、それを着物に仕立て、仲間の揃う正月や神社への参拝の際に着用しました。

いつしかマイワイは大漁の祝い着を意味する言葉になり、今日に至ります。

大日本物産図会　同國網鰹之圖（当館所蔵）

房総半島で生まれた万祝は、江戸時代の終わりから東日本太平洋沿岸に広く分布しましたが、時代の流れとともに需要が減り、現在も製作している染物屋は、万祝発祥の千葉県でもわずかです。

昭和62年（1987）野栄町（現匝瑳市）　万祝を着用した宮参り（千葉県教育委員会提供）

鴨川萬祝染　鈴染

鴨川市横渚にある鴨川萬祝染鈴染は大正十四年の創業。鈴木幸祐さんは三代目です。先代の榮二さんは「萬祝長着」、幸祐さんは「鴨川萬祝染」でそれぞれ千葉県から伝統的工芸品の指定を受けています。

鈴染は、現在も客の注文を受けて万祝を下絵から仕立てまで手掛けています。

三代目　鈴木幸祐さん

鴨川萬祝染鈴染　検索

凡例

・本パンフレットは、千葉県立中央博物館令和五年度映像制作事業「海をまとう—万祝染のわざ—」の成果をもとにしたものです。
・同タイトルの映像は千葉県立中央博物館ホームページで公開しています。
・工程の表現や道具名などは鴨川萬祝染鈴染で使用しているものです。
・鴨川萬祝染鈴染で使用している薬品は、使用後適切な処理をしています。
・太字になっている道具名は4ページに使い方の説明が書いてあります。

万祝い製作工程

つもり

下絵

型彫
型を彫る

型彫
糸がけ・柿渋

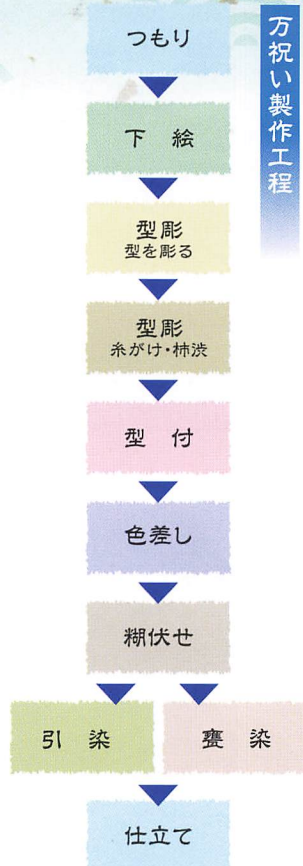
型付

色差し

糊伏せ

引染　甕染

仕立て

つもり

万祝を染める木綿生地の長さを測ります。この作業を生地の見積もりをとることから、「つもり」といいます。

下絵

既存の型を利用する場合

新しく作る型紙を下において、複製元の型紙と重ねて画鋲で固定します。**刷毛**で優しく薄墨を置いていくと、糊を置く部分は墨が着色された状態で転写されます。転写したあと、細かい部分は筆で微調整します。

型彫（型を彫る）

鈴染が作る万祝の型彫は基本は小刀で直線や曲線を彫り抜く引彫りです。

かつては小刀を使っていましたが、研ぐ時間が惜しいため、刃を付け替えるだけのデザインナイフに変わりました。現在でも、細かい部分では小刀や丸錐を使っています。

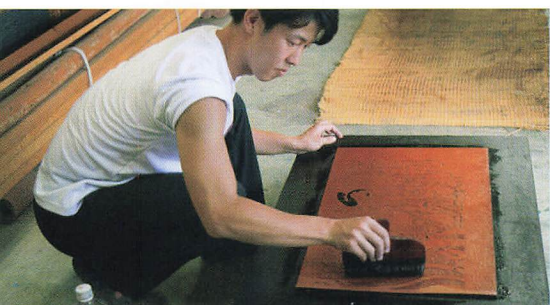
デザインナイフと小刀、丸錐

型彫（糸がけ・柿渋）

型のなかで細かい柄やそのままでは外れてしまう部分を絹糸で縫い付けます。これを「糸がけ」といいます。

表の凹凸を最小限にするために糸がけは、糊伏せをしない裏側から行います。専用の台に型紙を固定し、一本の糸を往復させて二本がけにして、補強していきます。

糸がけ後は、型紙の両面に柿渋を塗り、乾燥後につなぎ部分を切り落とし再び両面に柿渋を塗ります。柿渋の役割は型紙の補強です。柿渋は乾くと水をはじき、長持ちします。

型付

木綿生地に型を置きます。型付糊を**デバベラ**で型の上に置き、伸ばしていきます。糊を置いたら、型を手前から丁寧に外します。

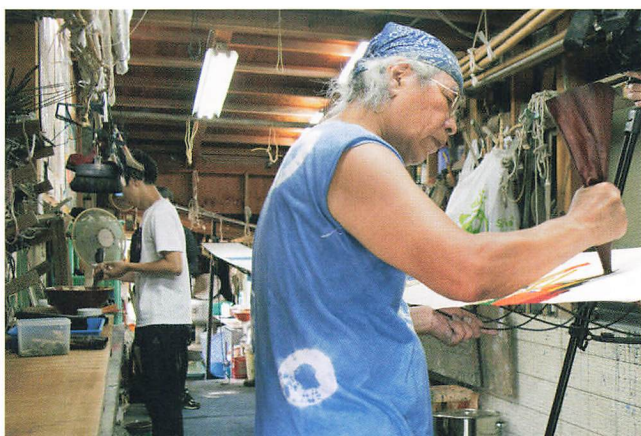
型付後は、裏から水で濡らした六寸**刷毛**や裏掻き包丁で生地をこすり、生地に水を含ませる「水入れ」をします。水入れによって糊が生地にしみ込むとともに、藍染の時に下染がしみ込みやすくなります。

色差し

鮮やかな色を付けていく工程を「色差し」といいます。万祝の色差しは、単調な塗りだけでなく、「ぼかし」という技法も使われ、非常に繊細です。

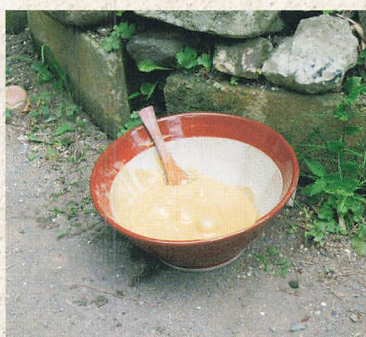
万祝の色差しの色は**豆汁**と顔料で作ります。**豆汁**に含まれるたんぱく質には色落ちを防ぐ役割があります。顔料をお椀に入れ、それを**豆汁**で溶いて色を作ります。

糊伏せ

染めの前に、色差し部分に染料が入るのを防ぎます。**筒金**をつけた**筒皮**にしゃもじで糊を入れ、色差しをした部分に糊を伏せていきます。伏せ糊を補強するために、おがくずで覆います。

おがくずを覆った状態

糊作り

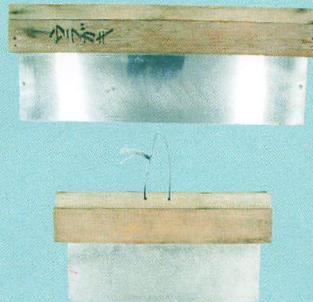
万祝染の柄には糊が欠かせません。まず、型付糊と伏せ糊のもとになる元糊を作ります。糯粉と小紋糠を三対一の割合で混ぜ、石灰とお湯で硬さを調整し団子状に練ります。練ったあとに、熱湯で一時間半から二時間煮るとお湯にも溶けない糊になります。煮た後は、すり鉢で練り、煮汁と調湿のための塩で調整していきます。

元糊

鈴染さんの道具説明

張り手

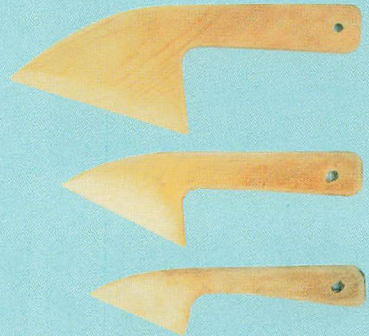
生地を宙づりにして、ピンと張るときに使います。昔の張り手は1本の板に釘が打ってあるだけでしたが、改良張り手では、細かい針のついた2本の板で挟むようになりました。

裏掻き包丁

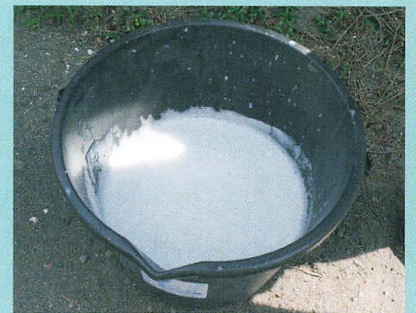
生地に水入れをする際に生地の裏をかく（こする）のと、包丁の形をしていることが由来です。現在は、自作の持ち手なしを利用しています。

デバベラ

出刃包丁のような形からデバベラといいます。糊を型につけたり、筒皮に入れるときに使います。

筆（小刷毛）

色差しに使います。材質は鹿、馬の毛が主で、柔らかめのものを使います。

伸子

鈴染では3種類の伸子を使います。伸子は生地の幅を均等に整える役割があります。色差しで使うものは伸子、色差しより太めの藍染で使うものを太伸子、水元でつかう細いものを絹張伸子を使います。伸子は使った後に、水桶にいれて、洗浄後に曲がりをまっすぐに戻します。

豆汁

大豆をすりつぶして出来る汁です。大豆のたんぱく質は顔料を生地に定着させ、色の滲みを防ぎ、さらに生地が染料を吸収することを助けます。

筒皮・筒金

和紙を柿渋で固めた筒を筒皮といい、その先端に付ける金具を筒金といいます。筒金の大きさで糊の量を調整します。

刷毛

用途によって幅の違う刷毛を使います。

型付糊

型付に使う糊です。元糊に小紋糠と石灰水を加えて、型付糊をつくります。伏せ糊に比べて粘りがあります。

伏せ糊

糊伏せに使います。型付糊同様に元糊に小紋糠と石灰水を加えてつくります。

甕染（かめぞめ）

藍甕に浸して染める技法を「甕染」といいます。

①染液（そめえき）をつくる

豆汁（ごじる）に青い顔料のベレンス・石灰（せっかい）を混ぜた染液を作ります。

②地固め（じがため）

刷毛で**豆汁**を主成分とする染液を引き、藍甕に浸して数日枯らして（乾燥させて）**豆汁**を固着させる一連の作業を地固めといいます。地固めで**豆汁**を固着させてから、本染です。

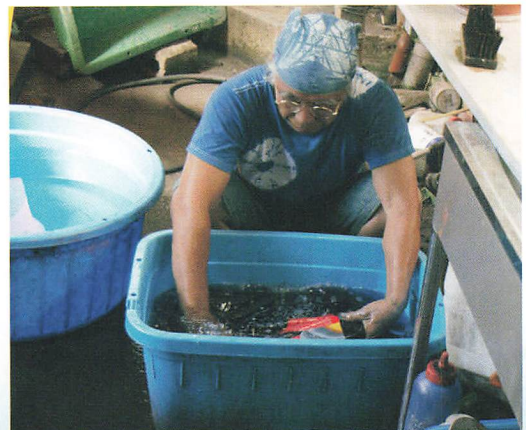
③本染

伸子（しんし）をもって生地を一つめの甕に入れていきます。しばらくつけたら引き上げて、折りたたんだ生地を甕の上で開いて、空気に触れさせて藍の酸化反応を促します。その後、一つ目と濃度の異なる二つ目の甕に浸し、再び空気に触れさせてさらに反応を促します。

甕につけた後、屋内で少し乾かします。これを染めの濃さによって二～三回繰り返します。

④水元（みずもと）

本染後すぐに**伸子**をさしたまま水に浸けます。**伸子**がついていることで、畳んだ生地の間に水が入り糊が取れやすくなります。時間をおいて、糊が緩んできたら**伸子**を外します。生地をブラシで擦（こす）って糊を落とします。

アルカリ性によっている生地を、希硫酸に浸けることで中和します。これを「酸ばり」といいます。酸ばりしたら、水洗いをします。

三十分ほどたつと、水からあげて**張（は）り手（て）**をつけて庭に干します。**飛（と）び伸子（しんし）**をさして流水で生地のカストリをし、**絹張伸子（きぬばりしんし）**をさして、乾かします。乾いたら、**張り手**と**伸子**を外して、たたみます。

引染（ひきぞめ）

地色（じいろ）の藍色を刷毛で何度も重ねていく技法を「引染」といいます。

①染液（そめえき）をつくる

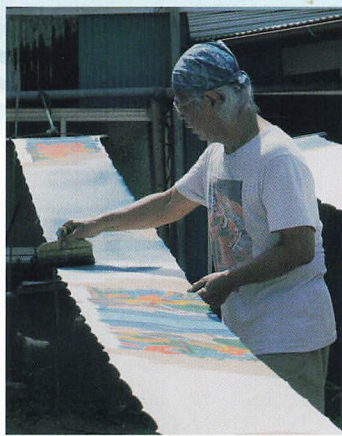
石灰をガーゼに包み、バケツに入れた**豆汁**の中で揉みこみます。次にベレンスも同様に揉みこんで溶かします。

②引染をする

最初に**豆汁**を主成分とするベレンス・石灰が混ざった染液で生地の表・裏・表を素早く刷毛で染めます。

乾いたら先ほどの染液に藍の染料を加えて引染を二〜三回くりかえします。

最初の引染

③水元（みずもと）

乾かした後、生地の糊を水でふやかして落とす「水元」をします。

糊が落ちたら、水からあげて**張り手**と**絹張伸子**で干します。両端を**張り手**で挟み、水をかけながら生地の表裏のカストリをし、**伸子**をさして生地の幅を整えます。乾いたら、表を内側にしてたたみ、仕立てまで少し寝かせます。

3 回目の引染。色が回を重ねるごとに濃くなっていく。

仕立て

染料が生地に定着したら、仕立てを行います。

かつては反物にすることまでが染物屋の仕事でしたが、今は仕立てのできる人が少ないので、注文に応じて仕立てまでして納品をします。

引染

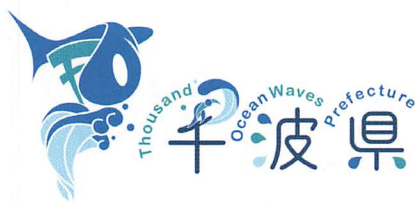
甕染

左が甕染、右が引染の万祝。
引染の万祝の色を鈴染では藍鼠（あいねず）という。
甕染は引染に比べて色が濃く、甕の中に入れて染めるので生地の裏側も濃い藍色。一方の刷毛で染める引染は裾模様部分を裏からは染めないため、裏側に表の柄が透けて見えるという違いがある。

今を生きる万祝

漁師の祝い着として房総半島から始まり、東日本の太平洋沿岸で流行した万祝は、昭和三十年代には漁師の祝い着としての役割を終えました。しかし、現在も染物屋の培（つちか）った万祝を染める技術や、彼らが受け継いできた祝いの柄は、職人の手によって祭り半纏や小物に活かされています。

受け継いできた技術をモノづくりへ活かす幸祐さんの息子、理規（りき）さん。

鴨川市江見地区の祭礼で鈴染の万祝を着る宮本町の人々。

映像解説パンフレット「海をまとう ―万祝染のわざ―」

発　行／千葉県立中央博物館

〒260-8682 千葉県千葉市中央区青葉町 955-2

デザイン・印刷／株式会社 正文社

発行日／令和６年（2024）３月15日

執筆・編集／渡瀬 綾乃（千葉県立中央博物館 研究員）

協力／鴨川市江見地区宮本町　鴨川市教育委員会
鴨川萬祝染鈴染　千葉県教育委員会
千葉県立房総のむら　東京文化財研究所

映像・写真撮影／株式会社 京葉広告社